



1998年7月
新曜社
本体価格5,800円

松崎一夫

何を演目に選ぶかで、演奏会の成否の半分以上は決まると言われる。選曲の段階で、演奏家の資質や態度が問われている。同様に、歴史家の著作も半分以上はその主題によって決まる。本書は、小熊の博士學位論文であり、修士學位論文をもとにした前著「単一民族神話の起源」(新曜社)から継承した著者の問題関心、「日本人」とは何か、で貫かれている。「日本人」とはどこまでの範囲の人々を指す言葉で、近代日本の境界(沖繩・アイヌ・台湾・朝鮮など)はどのような要因によって設定されてきたのかを問うことで、「日本人」および「日本」という概念を再検討することが、本書の主題である。この境界は、不動の実体でなく時期や状況によって変動するものである。それが、

どのように設定されているかではなく、境界をひくくという思考そのものを、小熊は問う。一見自明のことに思えて、その実茫漠とした主題を小熊は選んだ。自らの姿勢を「神話をこわす知」と位置づけ、小熊にとっては、相応しいものである。ところで、歴史家に要求されるものとして、徹底的な史料蒐集と批判を通じて、史実を限りなく正確に把握すること、その史実が持つ意味をつかみ出す能力がある。後者は歴史観と言ってもよい。前者の支えがあればこそ、本書が八百頁に迫る大著になったことは言うまでもない。では、小熊の歴史観の特徴は何であろうか。それは、「表現されえないもの」への執着であると言えよう。本書の本質は、「包摂」と「排除」の

狭間にある「表現されえないもの」をめぐる様々な立場の人間の葛藤をえがいていることにある。何事も単純に割り切れば、実に明快である。しかし、それは現実世界においては、困難であり、時に不可能である。利害対立と調整の場である「政治」において、「表現されえないもの」は多く、一見明快な言葉にアンビバレントな思いを託すしかないことがしばしばである。それゆえ、その思いを読み取ることは実に難しい。「日本人」と「非日本人」、「日本」と「植民地」、「東洋の有色人」と「西洋の白人」。単純な二項対立の図式の中で、どちらでも表現できないもの、されえないものをつかみ取るうという努力。ここにこそ、小熊の精髄がある。

この大部の全てを紹介することは出来ないが、評者は「第七章 最後の改革」に目を惹かれた。大戦末期、戦局が明らかに不利になる状況下、「日本」内部にある多様性や、欧米との対抗関係の中で、「日本人」の境界がどう設定されたかを論じた章である。朝鮮人を徴兵する要、欧米側による朝鮮独立承認をうたったカイロ宣言への対抗理念提出の要、そして朝鮮総督府と日本中央諸官庁との権限争い。これらが相俟って結局曖昧な対応に終始したあげく、一九四五年のソ連との和平交渉のために近衛文麿が記した要綱では、

地域統治の総体を間接統治路線とも同化路線ともならず、あえて「〇〇主義」の名称をつけるなら、「無方針」「漸進主義」であり、あるいは「ご都合主義」しかないであろうと言う。

かった願望や、整理しきれなかった感情や、どうしようもない怨念などを封じ込めたもの」と定義している。そして、その史料が訴えたがっていることを聞き取り、執筆する。それが、「いわば史料の供養祭のようなもの」であると言う。竹内好の著作に、苦悩に共感するもののみが相手を理解できる、という一節がある。史料から垣間みえる苦悩に対峙することで、小熊は過去を断罪するのではなく、真に理解しようとしている。

朝鮮・台湾、さらには沖繩も固有の領土には数え上げられていない。「それらの地域の人びとを日本人とみなすか、日本人にとどめるか否かは、あくまで政府の利益と意向で決定されたのである」と小熊はまとめるが、政府の利益と意向で決定することの正否はともかく、明確な読後感が残る。しかし、曖昧で切り捨てられる危険のある部分にこそ、歴史の真実が潜んでいると小熊は見、日本の周辺

人の境界が現今でも曖昧なことは、スポーツを例にとればわかりやすい。サッカーW杯大会において、外国籍選手であっても、日本に帰化をすれば日本代表チームへの被選出資格を得た。ラグビーの場合は、日本で何年間プレーしたかが問題であって、現在代表主将のアンドリュー・マコーミックは外国籍のままである。古くは、王貞治。春の甲子園で優勝投手になるほどの実力派であったが、国籍を理由に国体には参加できなかった。ここで設けられている境界は何によって決められているのか。そこに込められた思いは何か。境界は過去のものであるだけでなく、現在のものでもある。本書が読まれるべき理由はここにある。

小熊は、本書以外の場所で、史料を「昔の人々が当時において果たしえな

最後に本書を離れて蛇足を二つ。小熊は、会社員をしながら研究をしていた時期が長かったこともあり、自然に高速文献複写の技術が身についたとか。時間の遣り繰りをしながら、このような大部の著作の執筆が可能であるという事実は、本書が様々な事情を抱えた研究者にとっての福音書的性格を有することを示している。もう一つ、「日本の図書館の不便さと閉鎖性が改善されたら、勤労研究者にとつてどれほどありがたいことか知れませんか」と小熊は提言している。図書館関係者は傾聴すべきであろう。